

## 一 外国人教師をととした国際交流

### 1 多彩な外国人教師群像

#### ◆ 語学指導の外国人教師

外国人教師というと、何といても、語学の教師が数多く招かれています。

総合言語センター、その前身の語学センターには、当然のことながら、発足当初から、語学指導を担当する多数の外国人教師が活躍しています。語学センターが発足した一九七一（昭和四六）年四月には、英語部門に二名、ドイツ語部門三名、フランス語部門一名が招かれています。総合言語センターが発足した一九七九（昭和五四）年四月には、英語学科に三名、ドイツ語学科三名、フランス語学科一名、そして中国語学科に一名が、それぞれ在任しています。これらのなかには、学生指導に励むかたわら、研究の成果をまとめて学位を取得した方たちもいたのです。



## ◆文学部の「外国人教師問題」

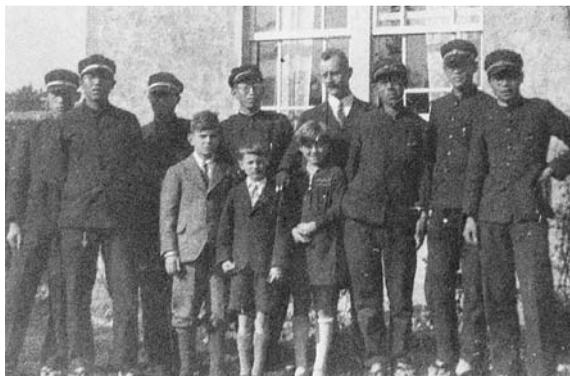
語学の教師といえば、文学部も早くから外国人教師を招いています。英文学、仏文学、独文学などを担当する外国人教師が続々着任しています。

文学部の外国人教師というと、いわゆる「外国人教師問題」が思いだされます。戦後の一九五〇（昭和二五）年四月に、各大学にアメリカ人教師の招へいという文部省の提案をうけて、英文学の外国人教師を招くことになり、翌年一月、E・A・ラニア博士と契約が結ばれました。戦後最初の外国人教師です。文部省の提案は、月額三万五〇〇〇円の給与と宿舍補修費八五万円の特支出という恩典つきでした。

けれども、これが学部全体をゆるがす騒動にまで発展したのでした。「講和をめぐつて政治的情勢が緊迫し、アメリカの対日政策が国の運命に重大なかかわりをもっていることが・・・過激なほどつよく意識されていた状況」であったなか、「手続の誤り」が問題化しました。着任という形で決着をみるまでに、学部自治への関心が高まり、民主的な原則や方式の確立が模索された出来事でありました。「ラニア事件」と名づけた報道もありました。

## ◆名古屋高等商業学校の外国人教師

戦前にさかのぼっても、幾人もの外国人教師が活躍しています。



外国人教師の家族と八高生

(『わが友 若き旅人よ、八高八十年祭記念誌』1988、所収)

本学の包括学校の一つである名古屋高等商業学校では、世界にはばたく人材の育成を目指していただけに、開校二年目の一九二一（大正一〇）年に、五名の外国人教師が赴任しています。英語担当のA・E・ニコルズ（英国）とA・P・マッケンジー（英国）、フランス語のA・ブーヅ（ロシア）、ドイツ語・商業地理のA・ヨーン（ドイツ）、それに商業学・英語のG・C・アレン（英国）の諸氏です。

このうち、ニコルズはもつとも長い在任者（一九二一—一九四〇）であつて、かれは「軽妙なるユーモアに富む会話・商英・タイプ等の指導に余念なく、校内外の信望を集め齎しく生徒の慕ふ所となれり」と伝えられています。体操担当のW・R・パークヒル（アメリカ）も、同じころ、招かれています。戦時色が強くなつた一九四二・四三（昭和一七・一八）年には、ドイツ語と支那語を担当する外国人教師が一名ずつ招かれています。『名

古屋高等商業学校一覧 自昭和十八年  
至昭和十九年』によると、同校には右の諸氏を含めてのべ一七名の外国人教師が雇われていました。

#### ◆第八高等学校の外国人教師

これも本学の包括学校である第八高等学校の場合は、体操科にW・R・パークヒルが招かれ運動競技師範を委嘱されてきました。右のパークヒルと同一人と思われず。一九二二（大正一一）年から二年間在籍し、「各種の近代スポーツの導入」と「アメリカ直輸入のスポーツ指導」で知られています。同じアメリカ人教師ジョンソンは、同校にバレーボールが入った当初（大正一二年ころ）、その指導に熱心でした。

第八高等学校の外国人教師といえ、ドイツ人教師A・ハーンが知られています。一九〇九（明治四二）年から一九二〇（大正九）年まで在職し、「日本文学の造詣が深く、夏目漱石の『満韓とところどころ』のドイツ語訳がある」という教師でした。一九三四（昭和九）年に就任したドイツ語教師のR・H・ハミッチは、生徒たちがドイツ語の難解なテキストにあきてくると、気分転換というわけで、「テキストを景気よくとして、音楽の時間にくりかえた」のでした。のどに自信があるとみえて、「自慢のテナーで『ローレライ』をうたいはじめ」と、「生徒たちがそれについて合唱した」ということです。『伊吹おろしの雪消えて―第八高等学

校史』(二九七三)には、さらに九名の外国人教師の名前があげられています。

#### ◆医学の外国人教師

医学関係機関にも、外国人教師がみられます。本学医学部の前身校である愛知県立愛知医科大学には、たとえば、一九二二(大正一一)年一〇月から一九二六(大正一五)年三月まで、医化学担当のL・ミハエリス(ドイツ)のほか、ドイツ語担当のF・K・A・ハーン(ドイツ)の名がみえます。ハーンは、これより前、まず前記のように第八高等学校で教壇にたち、つづいて愛知医科大学の前身である愛知県立医学専門学校でも、一九一〇(明治四三)年八月から一九一五(大正四)年三月まで教えていました。一時帰国していましたが、ふたたび招かれて愛知医科大学の予科でドイツ語を教えたものであります。

もつとさかのぼり、明治の初年にも、前身校である医学講習場と公立医学校、それに付設の病院に、すでに外国人教師が招かれていたのです。まず、一八七三(明治六)年五月にドイツ系アメリカ人のT・H・ヨングハンスが、つづいて一八七六(明治九)年五月になると、オーストリア人のA・フォン・ローレッツがやって来たのです。いずれも西洋医学の実務的な人材養成のために招かれたのでした。かれらこそ本学最初の外国人教師であります。

名古屋大学は、官制上、一九三九(昭和一四)年四月一日に創設された名古屋帝国大学に端

を発していますが、数々の前史をもち、その起源は遠く一八七一（明治四）年八月に開設された名古屋県仮医学校および仮病院にまでさかのぼりますから、本学の歴史がはじまって間もないころから、すでに外国人教師が就任していたこととなります。

## 2. 明治時代の「お雇い教師」

### ◆近代化のためのお雇い外国人

ヨングハンス (T. H. Yunghaus) とローレンツ (Albrecht von Roretz) は、明治のはじめに西洋医学を伝えた「お雇い教師」でした。

幕末から明治時代に、わが国は西洋文化を導入するため、先進国から進んだ技術や学問を体現した人材を積極的に招へいしましたが、政府だけでなく、地方も民間もそれに呼応して多数の外国人を招きました。「お雇い外国人」と呼ばれているかれらの正確な数は、容易に確定しがたいのですが、ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』（一九七五）には、一八六八（明治元）年から一八八九（明治二二）年までに活躍した、史実の確かな官・公・私のお雇い外国人二二九九名の名鑑が収録されています。かれらは、教育、医学、宗教、美術、音楽、政治、法制、外交、軍事、金融財政、郵便、交通、電気通信、産業、開拓など、実に多

方面で活躍したのでした。このうち、主として学校教師として招へいされた外国人は、狭義に「お雇い教師」と呼ばれています。

#### ◆お雇い教師の任務

お雇い教師には、おもに四つの職務がありました。①教師として授業を担当し西洋の科学技術を教えること、②教師の筆頭に位置して学校の経営に関与すること、③日本の為政者の諮問にこたえて意見を申し立てること、④これらの職務を効果的にすすめるために、その基礎となる調査研究をおこなうこと、でした。本務の余暇を活用した日本研究も、注目されます。

ヨングハンスとローレツも、このような職務を期待された「お雇い医学教師」でした。かれらの活躍は本学だけにかぎらず、日本の各地にいくつかの足跡を残しています。錦絵新聞や絵画にも描かれていますし、小説に登場してもいます。それに、かれらをとおして内外の交流もみられるだけに、どんな人物なのかとても興味深いものがあります。

以下では、かれらの人物像を紹介し、本学の歴史が始まったところに、かれらをとおしてみられた国際的な交流の一端を、明らかにしてみたいと思います。